

<講演>世紀末に向かって

佐々木, 基一

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

11

(終了ページ / End Page)

17

(発行年 / Year)

1987-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019484>

世紀末に向かつて

佐々木です。今日は小田切秀雄君の記念講演会で、僕は古い友だちなので前座を務めさせていただきます。

小田切秀雄君と知り合ったのは、いまからちょうど半世紀前。こんなに五〇年も長く、親しい付き合いができるなどは、その当時は考えてもみなかったんですが、いつのまにか年月がたつて、五〇年間、あいかわらず友だち付き合いをしているわけです。

そのころ小田切君は、まだ法政大学の予科の学生でしたから丸い帽子をかぶっていて、私は、東大の学生だから角帽をかぶっていました。

はじめて会ったときから、小田切君というのは非常にませた学生で、なにか予科の学生にしては、ずいぶんませた顔してるなあと思ったわけですが、それだけになにか、いくら年をとっても変わらなるところがあって、いまや年をとってから逆に、いまだに若いなあと、そういう感じになってきました。

顔がませているだけじゃなくて、考え方も非常にしっかりしてい

佐々木 基一

て、僕は一目みて惚れたわけです。これはなかなか優秀なやつだと。それ以来、友だち付き合いをしているわけです。

この五〇年のあいだには、いろいろなことがありまして、今の学生諸君からは想像できないような大きな変遷の時代といえますか、動乱の時代といえますか、そういう時代でしたが、その時代をわれわれは一緒に体験してきたわけです。

それともう一つは、小田切君や僕などの世代に共通した面は、われわれの若いころのちょっと前に、非常に盛んであった日本のマルクス主義の運動、プロレタリア文学の運動というものが挫折してしまつた。

昭和九年に日本のプロレタリア作家同盟が解散しますが、ちょうど僕が大学に入ったのは昭和一〇年です。大学に入ったときは、なにもそういう組織がないわけです。なにかやろうとしても、よりどころになるものが、なにもない。

僕は仕方なく、ちょうど大学の正門の前にあった学生消費組合

——学生でつくった消費組合があつて、それに入つたんです。いまの大学生協の前身なわけですが、いまの生協は、ものすごく金を儲けておりますが、われわれの時代は学生の手で経営していて、赤字ばかりで、四苦八苦していた。

そのころの学生の消費組合運動というのは、東大と法政、早稲田、明治、立教と、まあこれくらいのところ支部があつて、法政は非常に盛んなんですね。それから、早稲田は前に労働大臣などをやっていた石田博英が消費組合運動をやっていました。

おもしろいことには、その当時、東京学生消費組合の赤門支部、早稲田支部、法政支部というふうになっておりましたが、早稲田の消費組合運動というのは非常に議論ばかりやって、商売は下手くそで、赤字ばかりだね。東大支部でその赤字を埋めてやらなきゃならない。東大のほうが、わりと商売がうまくつたのです。(笑)

余談はさておき、前の時代に非常に盛んだった社会主義の運動、共産主義の運動とか、プロレタリア文学運動が退潮して、転向時代に入つた。こういう時代を共通に体験しているわけです。

まあ、小田切君は顔も昔からあまり変わらないわけですが、それと同じように、考え方も戦前・戦後を通して、一貫して変わらないと思うんです。

私は——まあ、これは小田切秀雄論でもやる人があれば参考になるかと思つて一言申しあげますが、小田切秀雄のヘソの緒は北村透谷と、ヘーゲルの「歴史哲学序論」という本がありますが、この二つにあるというふうに、いまだに考えている。

「自我と社会の対決」というのが小田切君の一貫したテーマで

す。社会と対決しながら人間が自己をかたちづくっていく、自分を確立していく、そこにほんとうの自我というものができるんだ、という考え方ですね。

つまり、できあがつた自我があつて、それが社会と対決するんじゃない、対決することによって自我というものができあがつてくる、そういう闘いを通してできあがる自我じゃないと、ほんとうの自我でないという考え方が一貫してあります。これはきわめて北村透谷的な生き方、考え方です。透谷が自由民権運動の挫折の後に文学的自我を確立して行くその過程も、わたしたちの青春時代と似たところがあります。

それからまた、こういう人間の個人的な自我というものが単なる個人の自由を求めるといふふうなことではなくて、それがなんといふんですか、世界的な自我というか、全人類的な自我というか、そういうなにか普遍的な人間の存在——人間の主体性といふんですか、そういう主体性をもった、人類的な規模をもった、そういう自己というものを確立しなきゃいけない。

狭い自分というもののなかに閉じこもるとか、固定されるんじゃない、広い世界に出ていく。出なくちゃいけない。

こういう考え方は、ヘーゲルの歴史哲学に顕著にあらわれている考え方です。ヘーゲルの「歴史哲学序論」という本をこんどちよつと読み返してみたんですが、小田切君が金科玉条にするだけあつて、たいへんに面白い。

僕なんかも学生時代にヘーゲルを勉強したわけですけども、たとえばこういうふうなことを言っているところがあります。

「人々は自己を自己と調和させている者を、幸福な人間と呼んでいる。」いわゆる個人の幸福というものは、自分が自分と調和している状態、つまり、まあ、アイデンティティをもっているということにある。

「だが、歴史は幸福のための地盤ではない。もろもろの幸福な時代は、歴史のなかの白紙である。」

平穩無事で平和な、なにも風波の立たない状態、それがみんなの幸せだけでも——いまは幸せという言葉が合言葉みたいにテレビなんかでしょっちゅう出ますけれども、しかしこれは歴史の地盤ではない。

歴史は、こういう幸せのために存在するんじゃないわけですね。そういう幸せいっぱい時代というものは、歴史のなかの白紙であるという考え方——それだから戦争だとか革命の時代がいいんだというふうなことは言えませんが、まあ、ヘーゲルはこういうふうに言っているわけです。

たしかに世界史のなかには満足がある。だが、その満足はいわゆる幸福ではない。つまり歴史が満足するということは歴史が幸福だというわけではない。なんとすれば、その満足は特徴的な関心を超越している目的の満足であるから。つまり各人のもっている特殊な関心を、個人的な関心を超越した目的を満たすときにはじめて歴史的な満足というものがある。

まあ、これは、革命とかなんとかいうものが起こりますと、いろんな犠牲が起こってきて、あまり幸福じゃないわけですね、いわゆる動乱の時代というものは。けれども、そういうものを通して歴史

は自己を満足させる、という考え方ですね。こういうことを言っている。

そして、こういう目的を追求してきた世界史的個人は、たしかに自己を満足させていたけれども、幸福になりたいなどは思っていなかったと。世界史的な個人、つまり歴史のなかで、そういう歴史が追求する目的を同時に自分の目的として追求する、そういう個人ですね。歴史の動向を一身に体得したような、そういう個人——まあ、ナポレオンとかなんとかいうような世界史的個性といわれる人物でしようけれど、そういう個人はたしかに自己を満足させたことはさせたかもしれないけれども、幸福になりたいなどは思っていないかった。

現代の日本は、おそらくぜんぜん正反対の行き方をとっているんじゃないか……。現代人はみんな、幸福は求めても満足は求めていないんじゃないか、という感じがして仕方がありません。

私の話は「世紀末に向かって」という題にしましたが、現代はもはや二〇世紀の世紀末でございませぬ。

さて、二〇世紀は世紀末になり、二一世紀に新しい世紀が始まるけれども、われわれにとって未来というものはあるのか、ほんとうの未来というものは、われわれにとってなんであるのか、ということとを考えると、私はさまざまに、或る場合には矛盾したことを考えざるをえないのです。

そして、さっきのヘーゲルの言葉を思い出したわけですね。もろもろの幸福の時代は歴史のなかの白紙である、という言葉を出して、おのおのの幸福な時代は未来がない、というふうなこと

を思わざるを得ない。

最近にもちよつと必要があつてドストエフスキイを読み返してみましたら、ドストエフスキイが一八八一年に、死ぬ直前ですけれども、ロシアの文豪のプーシキンを記念する講演会を行ないまして、その記念講演はなかなか有名な講演です。

これはプーシキンのなかにおける国際性あるいは世界性、そういうものとロシア精神とが一致するということを言っているわけですが、そのなかで、ロシアはたしかに後進国で遅れていて民衆は貧しい。みんな革の靴なんかも買えないで、木の皮の靴をはいたりしている。道路はぬかるみだらけで、非常に貧しい。しかし、「わが貧しき土地が、あるいは結局、世界に向かって新しき言葉を発するであらう、」というように非常に予言的なことを言っているわけです。つまり、ロシアは貧しいけれど、この貧しいロシアからヨーロッパなんかを統合するような、あるいは世界を統合するような、そういう新しい言葉が世界に向かって発せられるであらうということを言っております。これはもう、ある意味で予言的な発言だったといまから考えれば思われるわけです。

こういう言葉に触れますと、われわれは、ちょうど敗戦直後のことを思い出さざるを得ないですね。

あのころは、敗戦直後の日本は、東京をはじめとして爆撃でやられ、みんな廃墟になりました。食料はなく、みんな奇妙な顔をして、栄養失調で、シラミがわいて発疹チフスがはやり、そういうふうなひどい状態になりましたけれども、そういうような廃墟のなかから新しい言葉が発せられるみたいなの、そういう夢をわれわれは持った

わけです。

私はのちに「戦後文学は幻影だった」というエッセイを書いて、仲間からすごく恨まれたことがございますが、それはまあ、幻影であつたかもしれないが、その幻影のなかに一つの新しい言葉が発せられたということもまた事実であります。

こんどの戦争と敗戦という背景がなければ、おそらく作家にはならなかったであらうというふうな作家が、戦後になって生まれていきます。

たとえば大岡昇平とか武田泰淳とか、そういう作家の仕事を考えると、あれはやっぱ戦争と敗戦がなければ、いまのような作家にはならなかったんだらうと思う。あるいは、ほかの仕事についていたかもしれない。戦争と敗戦が、あの人たちに新しい言葉を発せしめた。そして、それは新しい文学になった。戦前までの日本には存在しなかつたような新しい文学を生み出さしめた。そういうことが言えると思います。

まあ、こんにちは、あの時代にくらべると非常に日本は豊かになっている。経済大国になりました、日本は貧しい国ではなくなったわけですね。

そうすると、逆に世界に向かって新しい言葉が発せられるところか、なにか言葉がしぼんでしまっている。そういう逆の現象が起きているような気がして、仕方がないわけです。

こういうことを言うと、私が年をとって、なにかこう年寄りのグチか繰り言みたいに聞こえるかもしれません。いま、新人類なんていう人類が生まれたらしいんですが、そういう新人類にくらべれば、

われわれは旧人類のまた旧人類かもしれない。

しかし、生きている以上は、なにかわれわれも生きている印を残していかなければならない。みなさんの前にこうして立つのも、一つの生きている印であり、私が七〇年のあいだ生きてきた、そういう時代は、ここに立っている私の姿かたちのなかにも浸透しているにちがいない、と思います。そういう、時代の一つの生き証人として私はここに立っているというような、そういうつもりで皆さんに見ていただきたい。

そういうことを考えますと、いま、新人類とかなんとかいう人たちが出現してくる時代になりました、どうも僕や小田切君なんかだと、この時代にどこか天からでもまいおりてきた、過去の時代からまいおりてきた、よそ者かなにかのような感じがして仕方がないわけですね。

それで最近、非常に心を打たれた体験がありました、そのことを一つ申しあげます。

それは映画です。ギリシアのアンドロプロス——「旅芸人の記録」という映画をつくった監督さんですが、あれがつくった「シテール島への船出」という映画があります。

シテール島というのはギリシアにある島ですけれども、象徴的な意味を持っていて、昔からターナーも絵に描いているし、ボードレールなんかも詩に書いたりしている。

つまりシテール島というのは、ヴィーナスの住む桃源郷みたいな、そういう島であると同時に、また死の島であると。そういうシテール島というのは、いわゆる憧憬の的であって、そのシテール島へ船

出すという象徴的なタイトルの映画です。

この映画の主人公、最初に出てくる主人公は中年の映画監督で、「シテール島への船出」という映画をつくらうとしている。

そして、それに主演する老人のオーディションをやるんです。ところが、まず、そこに出てきた年寄りたちみんなに一言ずつ台詞を言わせるんですけれど、どれにも満足できないんですね。

そうしたら、カフェーで休んでいるときに、ハンチングをかぶった老人がラベンダーの花を売りにきた。その老人を見た瞬間に、あっ、これだ、と思うわけです。そして、その老人のあとをずっとつけて、アテネの街を港のほうに行くと、ポッと老人の姿が消えてなくなるんです。

そして、それに代わって、埠頭に着いた船から一人の老人がタラップを降りてくる、それが、その映画監督の父親なんです。

彼は、ソビエトに亡命していたんです。戦後三十年間。ギリシアに戦後、内戦がありました。コミュニストだった彼は山岳地帯でゲリラをやったりして、長いこと内戦を続けた。そして、ついに負けて亡命しちゃったんです。それが三十年ぶりにギリシアに帰ってきて、ソビエトの船から降りてくるんです、バイオリンのケース一つ提げて。

その年寄りの親父さんを、さっきラベンダーを売りにきた老人と同じ役者さんがやっている。

三十何年間の亡命生活のあと、父親は滞在許可がおりて祖国に帰ってくるが、もう国籍は剝奪されているんです。

息子は映画監督で父に同情的だが、父のために何もしてやれない。

娘はアチャカ娘で、帰ってきた親父を邪魔物扱いする。過去の遺物のようにしか考えない。それから細君がいて、長いこと二人の子供を留守のあいだ育ててきた。

そういう連中をつれて昔、自分たちがゲリラ戦をやっていた山のなかに帰る。そこに家もあるわけですね。農場とか。そして昔のゲリラの仲間たちの墓がある丘へ行つて、昔の同志の名前を呼びながら墓を抱いて、昔を思い出している。

そうすると、なにか騒音が、ワーッとという群集の音が聞こえてくる。なんだろうと思うと、村中の人が丘の上を集まってくるんですね。

それは首都の大企業が村の農地を全部買い占めて、スキー場をつくるというんですね。いまだという観光開発ですよ、日本でも多い。それで、その土地の売りわたしの調印をするところだった。

だけど一人でも反対する者がいたら調印はできない。ちょうど、そこへぶつかった。それで、村中の人はみな賛成なんです、その親父さんは一人で——亡命から帰ってきたばかりだが、小屋から鋤を持ち出してきて丘を耕し始めたんですね。それで、めちゃくちゃになっちゃう。まあ、そういうふうな話です。

親父さんは、この村に迷惑をかけた、いらざる騒動をまきおこしたというんで、村中から総スカンをくう。

おまえは死人も同然だからと、村長が——これは昔、敵・味方で戦った村長なんです。いまは、やっぱり、だまされてたんだ、おれたちは、なんていうようなことを言っている村長ですけれども、とにかくそういうトラブルを起こしてくれちゃ困るというんですね。

どうか立ち退いてくれ、おまえはもう死人も同然なんだという。三十何年もの亡命から帰ってきたら死人も同然だというわけですね。そして警察のほうでも、トラブルを起こしてしようがない、滞在許可を取り消すというんです。それで、もう行きどころがなくなるんです。

で、ソビエトの船でソビエトに送り返すことにする。そうすると、ソビエトの船から、本人の意志をたしかめる必要がある、帰るか帰らないか返事しろと言ってくるんですが、親父さんは一度も返事しないんですね。「腐ったリンゴ」と謎めいた言葉を呟くだけなんです。

つまりもう帰りたくない、拒否してしまふんです。それで、もう行くところがない。ちょうど日曜日で、官庁も休みで、警察署ではどうにも処置のしようがない。

しかし、国外退去を命じられているから、親父さんを国内にとどめておくわけにいかないというんで、海の上——公海上のブイの上につれていって、そのブイの上に雨がザーザーと降るなを一晚中親父さんをおの上においてきぼりにする。

息子なんかは、ただウロウロするばかりで、なんにもできない。無能なんですね。娘なんかは、もう親父は早くどこかへ消えていくなければいいと云うんです。邪魔者あつかいしている。

年とった奥さん——細君だけが、あの人のそばに行きたいと言って、それで最後に警察のボートでブイのところに連れていってもらって、雨のなかで抱き合って一晚、夜を明かす。

そして朝になると、親父さんはブイを留めていた綱をほどいて、

そのブイがズーッと沖のほうへ流れていくんです。それが「シテール島への船出」です。

たいへんに感動的な映画で、僕なんかは非常に身につまされてしまったわけですが、どうも僕や小田切君なんか、ちょっとこの「シテール島への船出」の主人公に似たところがないでもない。

また最初に出てくるラベンダーを売っている年寄りに似たところがないでもない。われわれも、いまや街で、巷で花売りでもしている爺さんじゃないか、という感じがしましたけれども、しかし考えしてみると、どうも未来がもしあるとすれば、そういう爺さんの頑固さのなかに逆に未来があり、そういう古い昔の世代の頑固親父といまの新人類の若い世代とが交流しあうことによって、はじめてなにか未来というものが拓けてくるんじゃないか、という感じがしてならなかったんです。

まあ、われわれはもう年寄りですから、これから巷に出ていって花でも売るよりほかないかもしれません。こういう人が日本にも、いろいろたくさんいると思います。

日本では、とくに明治・大正の民衆運動といいますが、民衆が自分を解放するための運動というのは、すべて途中で挫折を余儀なくされている。自由民権運動しかり、その後のいろいろな運動もみんなそうです。すべて挫折への道をあゆみます。

そういう挫折のなかから——まあ、指導者なんかは死刑になったり殺されたりするんですけども、そういう運動に参加した人がその後、巷のなかに隠れる、ラベンダーの花を売っている、そういうふうな人が、いろいろいるにちがいない。

そういう人こそ、なにか未来への一つの種子、胚種になるんじゃないか。そういう挫折の体験というものを何回も積み重ね、そういう挫折から学ぶことが、われわれは必要んじゃないか。勝つことばかりが能じゃない。

まあ日本人というのは、一般的な人は民衆運動にはあまりついていけないけれども、戦争となるとすぐについていく。戦争には、たいへん弱いです。われわれの体験からいっても、そうです。

たとえば、二・二六事件なんていうのが起こりましたけれども、あれを、二・二六事件は民衆の支持を得ていたんじゃないかなんていう人がいますが、これは絶対に、われわれの体験からいってもそうではなくて、とにかくあれは困ったことだと民衆は見ていた。

しかし、その後、中国との戦争が起きると、これはダーッと雪崩のごとく、そのなかに巻き込まれていった。革命とか右翼のクーデターとか、そういうものは日本人はあまり喜ばないけれども、戦争となると非常に弱いんです。戦争に対しては、そういう体質をもっている。

だから、民衆運動が挫折した、そういう挫折の体験というもの——負けて負けて何回でも負けて、そのうえでなにかが生まれてくるとすれば生まれてくるんじゃないか。そういうふうに気長に、歴史のペースペクティブを非常に長くとる、そういう考え方というか、生き方が必要じゃないか。

まあ、そういうことを、世紀末に向かって未来はあるかという問いを自分に発したときに考えます。

だいたいそういうことで、私の話を終わります。(拍手)